

不登校予防研究部 研究報告 (概要)

研究主題 市内小・中学校の不登校ゼロを目指して
—教室で育てよう！楽しさの木—

概要説明 不登校の問題は深刻化している。そのため、今年度も不登校予防研究部では、昨年度の研究を継続し、教室・学級で可能な不登校を予防する取組を実践した。児童生徒の心を育てる手立てとして、学級、学校が楽しいと感じることを日々振り返る（楽しさ探し・良かったこと探し）活動を実践した。この活動を通して、児童生徒が、人によって楽しさの感じ方が違うことを知り、自分に置き換えることで仲間とのよりよい関係作りができるのではないかと考えた。この研究では、学級と個で2つの取組を通し、児童生徒の心の変化を調査した。調査は研究の実施前・実施中・実施後の計3回のアンケートによって、その結果を分析した。アンケート結果の分析では、介入した学級と介入していない学級を比較し、取組の効果も検証した。

※介入：本研究の取組を実施すること

本研究のキーワード

- | | | |
|------------|--------|--------------|
| ○振り返りの積み重ね | ○毎日出来る | ○すべての学級で実施可能 |
| ○楽しさの発見 | ○認知の変容 | ○学級満足度 |
| ○1日の振り返り | ○自己洞察 | ○居場所づくり |

I 研究主題

市内小・中学校の不登校ゼロを目指して —教室で育てよう！楽しさの木—

II 主題設定の理由

所沢市の不登校の要因については、経済的格差・家庭の教育力、児童生徒の人間関係づくりのつまずきや、困難さが挙げられる。学級で、よりよい人間関係を作り上げるためのソーシャルスキルトレーニングや、構成的グループエンカウンターなど、短時間で実施可能なプログラムは、現在数多く研究されている。しかし、教員にとって、準備の時間や実践する時間の確保は大きな課題である。

そこで、本研究部は、教員の負担が非常に軽く、毎日学級で実施可能で、なおかつ小学校・中学校のできる取組として、何ができるのか考えた。

検討の結果、本研究部では、学校・学級で1日を過ごした中で、楽しかったことを振り返らせるとともに、学校・学級での満足度を少しでも向上させ、児童生徒自身に居場所があることを認知させる手立てについて研究することにした。

また、児童生徒が仲間の楽しさ・良かったことなどを知ることで、楽しさに対する認知が人によって違うということを知り、他者の認知の形態を、自身へ取り込むことができるのではないかと考えた。そこで、①自分を知る、②他人を知る、③集団を知る、という段階を経て、自分の楽しさを発見していくことから集団へとつなげていくために、児童生徒が個人で取り組む“楽しさの木”と、学級全体で取り組む“楽しさの木”を通して、よりよい心の成長を図ることを目的として主題を設定した。

今回、「小学校用学校不適応感尺度（戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野，1997）」、独自に設定した学校満足度を測定する項目により、効果の検証を行う。ここでは、小学生用学校不適応感尺度の下位尺度である、「友だちとの関係」、「先生との関係」、「学業場面」、また、独自に設定した「学校生活満足度」の得点変化を分析することとした。

III 研究の方法と内容

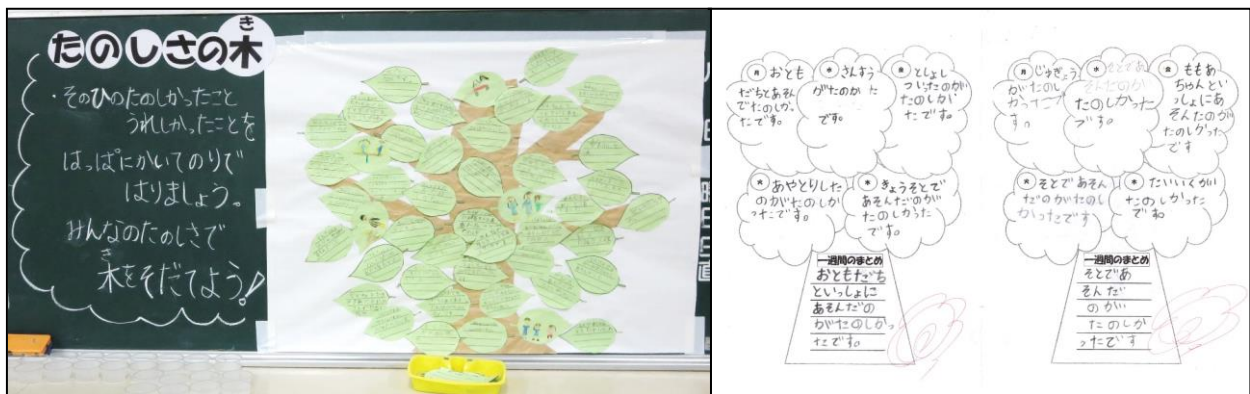
1 研究の内容及び方法

(1) 楽しさの木（学級）

教室の背面黒板に、木の幹が描かれた模造紙と、葉を模した小さい用紙を用意した。そして、児童生徒は、「楽しかったこと」「うれしかったこと」（授業のことや、休み時間に友達と過ごしたこと、行事で感じた事など）を書き、模造紙に貼っていく活動を行った。記入は無記名で、模造紙は教室の背面にある黒板に貼ることにより、学級の児童生徒がいつでも見たり貼ったりできるようにした。休み時間の好きな時に貼ることも可能で、「みんなで楽しさの木を育てよう」という気持ちで導入した。なお、紙に書いた本人や遊んだ相手などの個人名は記入せず、個人が特定されないように配慮した。

(2) 楽しさの木（個人）

背面黒板とは別に、児童生徒全員にA4サイズ用の紙を配付し、その日の「楽しかったこと」「うれしかったこと」を書かせる活動を行った。毎日の帰りの会等に1日を振り返る時間を3分程度設け、記入させた。各曜日の記入とは別に、金曜日には1週間のまとめとして、今週、最も楽しかったことや、楽しさ集めについての感想を記入させるようにした。なお、個別ノートには遊んだ相手など個人名は記入しても良いとした。担任は金曜日にノートを回収し、コメントはつけずにサイン・判子のみをつけるようにした。開始当初、児童生徒は若干時間がかかるものの、慣れてくると、1～2分で記入可能となる。



(3) 学校不適応感ならびに学級満足度の測定と分析

調査は、研究部員4名の担当学級において実施した。調査対象は小学1年24人、小学4年37人、小学6年56人（うち介入群31人）、中学1年64人（うち介入群30人）の計181人である。

また、学校生活における不適応感について尋ねる尺度として、戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野（1997）の「小学生用学校不適応感尺度」を使用した。本尺度は、「友だちとの関係」「先生との関係」「学業場面」の3つの下位尺度からなる15項目4件法の尺度であり、

各下位尺度の合計点を検討に用いた。

加えて、独自に「1日の生活は楽しいですか。」「1日の生活の中で楽しいことを見つけられますか。」「学校の生活は楽しいですか。」「学校の生活の中で楽しいことを見つけられますか。」「学校に来たいと思いますか。」「学校の生活は充実していますか。」「クラスの中で居場所がありますか。」「自分に自信はありますか。」という8項目を設置し、これを学校満足度とし、合計得点を算出した。なお、そのうち「学校の生活の中で楽しいことを見つけられますか。」という項目での自由記述で回答を求めた選択肢と、質問項目はTable.1に示す通りである。

測定は9月1日、10月1日、11月1日の3回行った。今回は介入前後の変化について、9月と11月における測定結果の比較分析を行うこととした。

Table.1 「小学生用学校不適応感尺度」選択肢・質問項目

「小学生用学校不適応感尺度」 選択肢・質問項目
選択肢
1. ぜんぜんあてはまらない
2. あまりあてはまらない
3. すこしあてはまる
4. よくあてはまる
質問項目
1. あなたは、クラスの友だちからきらわれていると思いますか。
2. あなたは、このクラスで、のけものにされているような気がしますか。
3. 友だちは、よくあなたの悪口をいっていると思いますか。
4. 友だちは、あなたのことをしんようしていないと思いますか。
5. あなたのクラスには、あなたのしっばいをよろこぶ人がいますか。
6. 先生は、なんでもよくわかるように教えてくれますか。
7. 先生は、あなたのいうことをよく聞いてくれますか。
8. 先生は、あなたがしっばいしてもばかにしないで、親切に教えてくれますか。
9. 担任の先生が休むと、さびしいと思いますか。
10. 先生は、自分の考えをおしつけすぎると思いますか。
11. 勉強をやる気がなくて、もうだめだと思いますか。
12. きらいな勉強がある日には、学校を休みたくなりますか。
13. 勉強なんかどうでもよいと思っていますか。
14. テストのことを考えると、いやでたまらなくなりますか。
15. 早く授業が終わらないかと、思うことがありますか。
16. 1日の生活は楽しいですか。
17. 1日の生活の中で楽しいことを見つけられますか。
18. 学校の生活は楽しいですか。
19. 学校の生活の中で楽しいことを見つけられますか。
20. 学校に来たいと思いますか。
21. 学校の生活はじゅうじつしていますか。
22. クラスの中でいばしょはありますか。
23. 自分に自信はありますか。

IV 実践例

○東所沢小学校の楽しさの木（1年生）



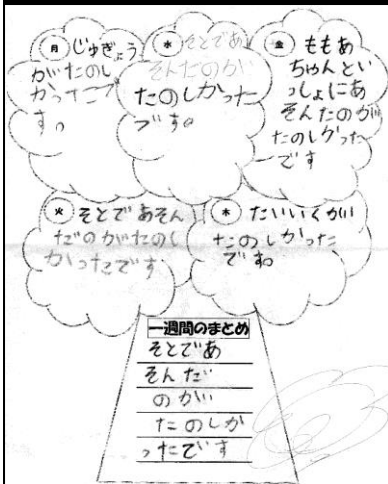
○書いている内容

項目	内容
友だち	<ul style="list-style-type: none"> ・お友達と遊んだのが楽しかったです。 ・みんなと学活をしたのが楽しかった。
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・国語が楽しかったです。 ・体育が楽しかった。 ・図工が楽しかった。 ・算数をしたのが楽しかった。 ・鉄棒でコウモリができてよかった。 ・漢字の勉強が楽しかった。 ・図工でお友達の作品が上手だった。
休み時間	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカーをしたのが楽しかった。 ・おにごっこをして楽しかった。 ・今日は30分休みにKちゃんと登り棒をしたのが楽しかった。 ・うんていが楽しかった。 ・シーソーが楽しかった。 ・30分休みにみんなで遊んだことが楽しかった。 ・中庭でおおりおにをやったのが楽しかった。 ・ポケモンごっこが楽しかったです。 ・30分休みの鉄棒が楽しかった。 ・図書室で本を読むのが楽しかった。 ・昼休みに踊ったこと。 ・ふえおにが楽しかった。
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の練習が楽しかった。 ・玉入れの練習が楽しかった。 ・6年生と遊んだことが楽しかった。 ・音楽会が楽しかった。 ・体育のマラソンの授業で4位を取れてよかった。 ・徒競走が楽しかった。 ・運動会のダンスが楽しかった。 ・大玉送りが楽しかった。 ・大玉送りで2回1位を取れてうれしかった。 ・音楽会の3年生の演奏が上手だった。 ・音楽会の5年生の「ブラジル」がすごかった。 ・音楽会でうまくピアノカがふけてよかった。 ・音楽会でピアノカを上手にできました。 ・運動会の踊りを踊ったこと。 ・マラソン大会の練習が楽しい。



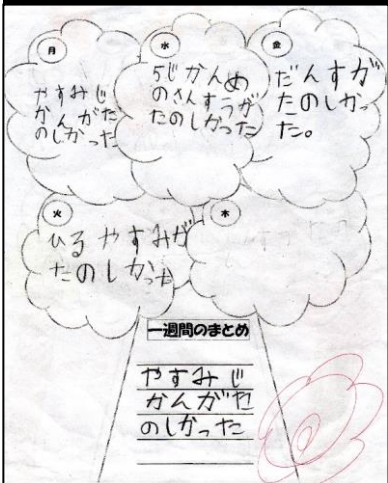
○楽しさの木 (個人)

1 学校生活に対して前向きな児童 A児の場合



比較的、自分の楽しかったことを書くことがスムーズにできた児童である。楽しいこととは何かを自分で判断でき、そして記述することもできる。その内容も多岐にわたる。個人的なこともあるが、友達と関係したこともある。また、授業についても書いていることがあるため、学習にもとても意欲的に取り組んでいることがわかる。毎日の学校生活に対して、前向きな心の持ち方をしているのではないかと考える。何より、記述内容が具体的であるため、毎日を振り返ることができていると考える。

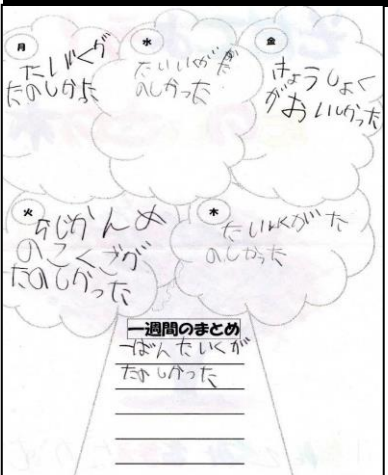
2 学校満足度の低い児童 B児の場合



この児童はアンケート調査の中で、学校満足度が低い結果となっている。9月の最初の時に、「学校に来たいと思いますか。」という質問に、「ぜんぜん当てはまらない」と回答している。また、「学校生活は充実していますか。」という質問には「あまり当てはまらない」と回答している。つまり、学校に対して、プラスなイメージを持っていないことが予想される。毎日の記録でも、淡々とした記述や、抽象的な内容が目立つ。9月の終わりの2回目のアンケートでは、「学校に来たいと思いますか。」「学校の生活は充実していますか。」「自分に自信はありますか。」の質問で、「全然当てはまらない」と答えている。しかし、10月の最後のアンケートでは、「学校の生活は充実しています。」は依然として

「全然当てはまらない」ではあったものの、他の質問は全て「よく当てはまる」に変更されている。行事などの影響も考えられるが、友達と遊ぶことが楽しいと書いているものも増えた。継続的な取組の成果ともみることができないのではないかと考える。

3 不登校傾向のある児童 C児の場合



この児童は4月の時に登校しぶりをしている。登校はするが、母親と一緒になければ登校できないことが2週間ほど続いた。2学期はそのようなことはなくなったが、母親はまたしぶるのではないかと心配している。楽しさの木では言葉足らずな面もあるが、自分の楽しかったことを表現できているように見える。また、運動や体を動かす遊びが好きなため、友達を誘って遊ぶ姿も多くみかけるようになった。

○所沢小学校の楽しさの木（4年生）

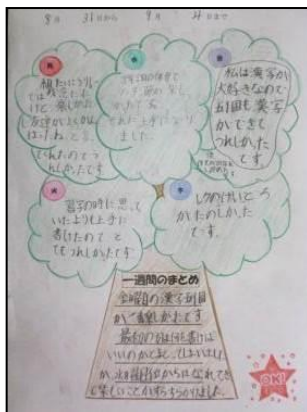


○書いている内容

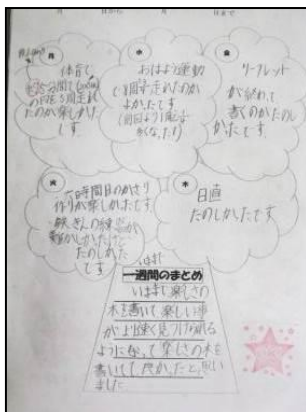
項目	内容
友だち	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとたくさん話すことができて楽しかったです。 ・いろいろな友だちと遊ぶことができてよかったです。 ・係活動で友だちと仲よくたくさん活動できて楽しかった。
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の三富の開たくで、自分で勉強のまとめを書いたのが楽しかったです。 ・外国語の授業が楽しかったです。 ・理科で水でっぽうを作って遊んだのが楽しかったです。 ・図工でソーラン節のはっぴの絵を上手に描けてうれしかったです。 ・体育の持久走で今日の目標を達成できてうれしかったです。 ・総合の調べ学習が楽しかった。 ・総合でパソコンを使ったのが楽しかった。 ・総合の発表で緊張したけど上手にできてうれしかった。 ・クラブが楽しかった。 ・2学期に習う漢字が終わってよかったです。
休み時間	<ul style="list-style-type: none"> ・レクでドッチボールをして最後まで残れてうれしかった。 ・ドッチボールが楽しかった。 ・レクで冷凍人間を初めてやって楽しかった。 ・みんなとおにごっこで遊べてよかったです。
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーラン節の練習で1回も間違えずにできてうれしかったです。 ・お助けつなひきで1組に勝ってうれしかった。 ・運動会で負けちゃったけど頑張ったから楽しかった。 ・音楽朝会で歌えたのが楽しかったです。 ・なかよし給食／遊び（※所沢小の異学年交流）で他の学年の子と話したり遊んだりして楽しかった。 ・すもう大会で相手に勝った。 ・すもう大会でたくさん応援できてよかったです。 ・音楽会で上手に発表することができてよかったです。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・給食がおいしかったです。 ・給食で出たご飯が苦手だったけど、食べられてうれしかったです。 ・魚がかえるようになってうれしいです（ナマズ・ドジョウ）。 ・今朝早起きできてうれしかったです。 ・朝ご飯がおいしかったです。 ・ミニーの絵が上手に描けた。 ・登校中に猫に会って、猫がかわいかった。 ・大きな声であいさつができた。

○楽しさの木（個人）

1 学校生活に対して前向きな児童 A児の場合



介入前



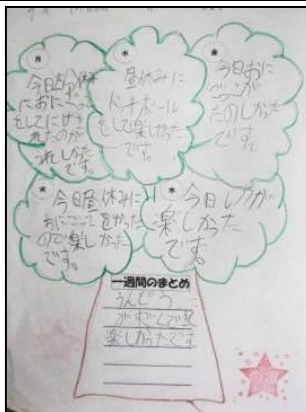
介入後

介入前は、授業や友だちとの関わりの中で楽しかったことなどを多岐にわたって書かれている。その一方で、まとめには「何を書けばいいのかとまどってしまった。」とあるように、1日の楽しかったことを振り返ることに慣れていない様子が見られる。介入後は、内容に差異は見られないものの、まとめには「楽しいことをよりはやく見つけられるようになった。」とあり、振り返りに慣れ、この活動を通してより意欲的に学校生活を送ることができている様子が見える。

2 学校満足度の低い児童 B児の場合



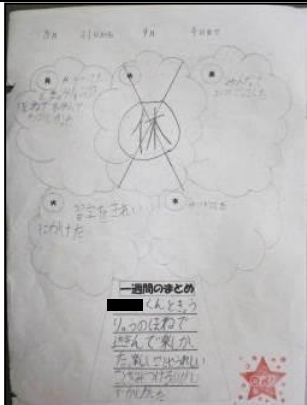
介入前



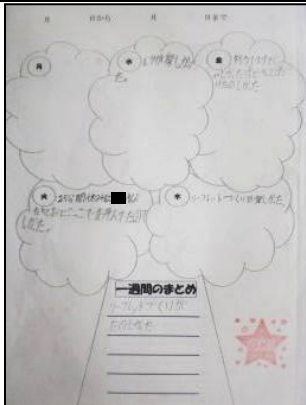
介入後

介入前は、運動会のソーラン節や給食についてなど自身の活動についての記述が多く、他者との関わりについてあまり触れられていないことがわかる。介入後は、学習内容等自身のことに加え、「休み時間に多くの友だちと遊んだこと」や「遊びの中でのうれしかったこと」など他者との関わりに触れた記述が増えている。また、質問紙調査では、友だちに関する項目と学校満足度が当初より向上しており、この活動を通して変容したことがうかがえる。

3 不登校傾向のある児童 C児の場合



介入前



介入後

この児童は、年度当初より登校しぶりが見られている。登校した日は授業や休み時間を楽しみながら過ごしているものの、朝から登校することができない日や、そのまま欠席する日も多い状況であり、その原因が不明瞭である。

介入前は、特定の児童との関わりが多く書かれており、心のよりどころにしていることがうかがえる。1週間のまとめには、「楽しいことやうれしいことをみつけるのがむずかしかった。」とあり、振り返りに慣れていないことがわかる。一方、介入後は、別の児童

の名前も出るようになり、授業内容や休み時間のクラスレクなど自身の活動、たくさんの友だちとの関わりについて多く書かれるようになった。まとめには「楽しいことを見つけれられるようになった」とあり、活動を通して楽しかったことを自分の言葉で表現できるようになったことがわかる。質問紙調査では、学校満足度が向上しており、学校生活を意欲的に捉えるようになった。この活動は、不登校傾向の原因を探る上で有効であると言えるのではないだろうか。

○富岡小学校の楽しさの木（6年生）

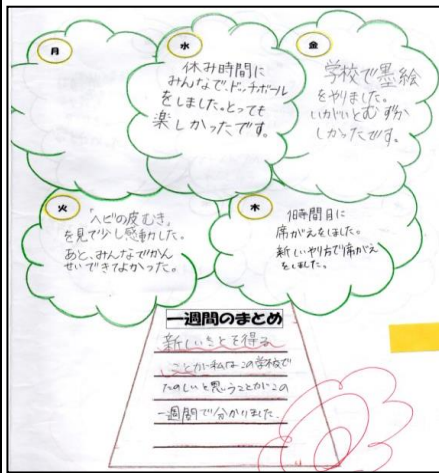


○書いている内容

項目	内容
友だち	<ul style="list-style-type: none"> ・ 休み時間に友だちとおもしろい話をしたこと。 ・ 給食の時間で友だちと話をしながら食べたのが楽しかった。 ・ レクでみんなとおにごっこをしたこと。 ・ 友だちの一発芸が楽しかった。 ・ 転校する人のためにお別れ会をみんなでしたこと。 ・ 劇がうまくいったこと。
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ パソコンで調べ学習をしたのがおもしろかった。 ・ 外国語活動の時間に国の国旗を使った授業をしたこと。 ・ 積極的に話そうで色々なことがわかったこと。 ・ アルファー米を作るところ。 ・ 算数の比がわかったこと。 ・ 道徳の勉強が楽しかった。 ・ 雪舟に挑戦してやった墨絵が楽しかった。 ・ 音楽の時間が楽しかった。 ・ 国語で文を作ったこと。 ・ 図工の下書きが楽しかった。 ・ 社会の時間に忍城のビデオを見たこと。 ・ 電子黒板で授業をしたこと。 ・ 外国語活動で英語の歌を歌ったこと。 ・ しっぽとりでたくさんのしっぽを取れたこと。
休み時間	<ul style="list-style-type: none"> ・ ジャングルジムおにごっこが楽しかった。 ・ ドロケーが楽しかった。 ・ サッカーをしたのが楽しかった。 ・ 1年生とおにごっこをしたこと。 ・ 雨の日に将棋をしたこと。
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 修学旅行の行動班がきまった。 ・ 修学旅行の部屋が決まったこと。 ・ 体育で組体操の練習をするのが楽しかった。 ・ 修学旅行が楽しかった。 ・ 組体操の人間おこしが楽しかった。 ・ 二校親善の練習をしたこと。 ・ へびの皮むきができたこと。 ・ 10人タワーで痛かったけどできたこと。 ・ 全員ピラミッドが完成したこと。

○楽しさの木 (個人)

1 学校生活に対しての前向きな児童 A児の場合



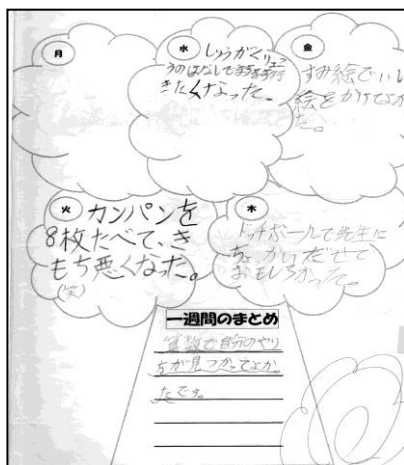
毎日の中で、楽しいことを見つけている。ここに書くのが日課となり楽しく書いている。また一週間のまとめを書くことで自分の楽しかったことを確認している。

一週間のまとめ

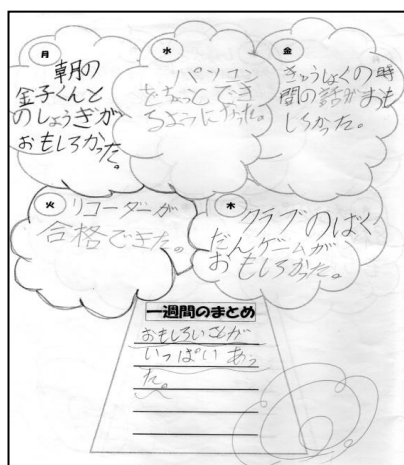
「新しいことを得ることが私はこの学校で楽しいことである。」

普段から楽しんでいる児童は、しっかりと自分が何に対して楽しいのかに気がつくことができる。

2 学校満足度の低い児童 B児の場合



介入前

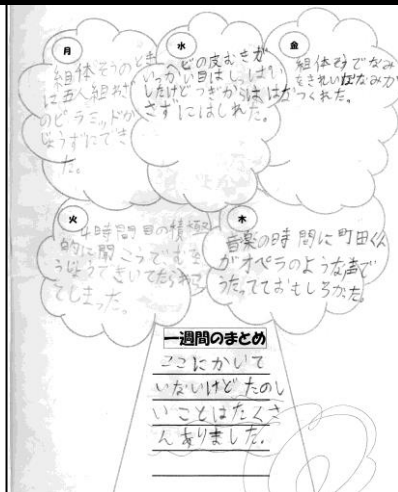


介入後

根は優しいのだが、普段から友だちに対しての言葉使いで乱暴な所がある。そのうえ、自分は周りの人から嫌われていると思こんでいる。

この取組を通して、最初は自分自身の行動に起因する楽しさを多く書いていたが、徐々に、人との関わりが楽しい、と書くようになり、変化が見られた。

3 不登校傾向のある児童 C児の場合



4年生の時に不登校になったが、5年生以降は、年5日以内になっている。決して表に出ようとせず、常に一人が好きな児童である。しかし、楽しさの木を行っていくうちに、友だちの名前などをたくさん書くようになってきた。

一週間のまとめには、「ここには書いていないけど楽しいことはたくさんありました。」とあるように、学校での楽しさに気付き、前向きに捉えている様子が伺える。友だちとの関係や物事の達成感に楽しさを見いだしてきた、と考えられる。

○狭山ヶ丘中学校の楽しさの木（1年生）

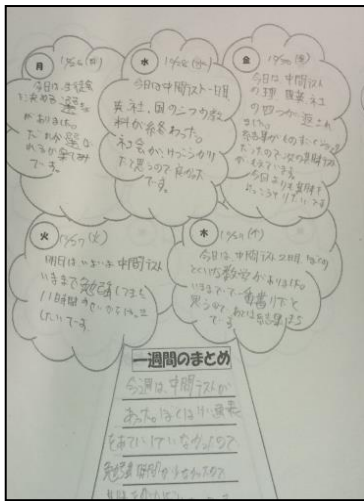


書いている内容

項目	内容	
学級	<ul style="list-style-type: none"> ・久しぶりの登校が楽しかった ・楽しく掲示物を作ったこと ・水曜日に掃除が無い ・みんなに会えてテンションが上がっていっぱい笑えた ・給食当番じゃなかった ・先輩といっぱい話せて楽しかった ・先生といっぱい話せた ・島巡りをした・班ポスターで消しゴムをゲットした ・自分が落とした物を拾ってくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・2回連続で班ポスター賞 ・給食の牛乳が冷たくておいしかった ・日直じゃなくてよかった ・久しぶりに友達に会えたこと ・先輩とふざけあったこと ・13歳になった ・夏休み明けに表彰されたこと ・席替えが楽しかった ・ある人と話したこと ・遊んだこと
授業	<ul style="list-style-type: none"> ・国語が楽しかった ・授業中のニスを塗っているときの会話 ・社会の中テストで全部書けた ・久しぶりの数学が楽しかった ・宿題がちゃんと出せたのでよかった 	
部活	<ul style="list-style-type: none"> ・部活が楽しかった ・自己ベストが出た ・部活の大会で金賞が取れた ・中練習が楽しかった ・スタミナが増えた ・サッカーでうまいシュートが決められた ・県の記録が13位で先生に褒められて嬉しかった ・久しぶりに外で部活ができてよかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活で2年生と同じメニューをした ・部活の友だちと遊んだ ・部活ができた ・水曜日に部活があったこと ・3年生の先輩が部活に戻ってきた ・大会で陸上部のみんなが頑張ってくれた ・部活・部活が楽しくなってきた ・コンクールに出られて楽しかった ・練習試合で点数が取れた ・練習で先生に褒められました
行事	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭が楽しかった ・学校が1時間だった ・大縄で83回飛べた ・体育祭みんなと協力できた ・体育祭で準優勝 ・体育祭の応援 ・体育祭全力で応援したこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育祭準優勝 ・体育祭の行進で楽器を吹いた ・体育祭準優勝で悔しかったけどみんな頑張っていたこと ・体育祭とっても楽しめた
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・誕生日が来たこと ・空がきれいでもとてもよかった ・生きることかできた ・今日が無事に終わったこと 	

○楽しさの木 (個人)

1 学校生活に対して前向きな生徒 A 生徒の場合



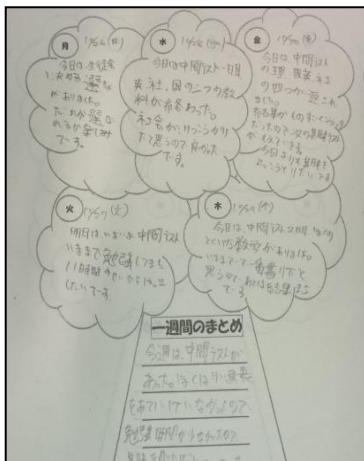
左のように、1日のことを個人の振り返り表にしっかりと振り返ることができる生徒は、学校に対しての満足度も高い。学級のことや友達のことに対しても、日々、振り返ることができ、楽しさを発見することができている。

また、この生徒は学級委員を務めているので、クラス全体を客観的に見ているということも考えられるため、日ごろからいろいろな視点から学級を見ているのではないかととらえている。

《一週間のまとめ》

- ・理科の実験は結果が面白くて楽しかった。
- ・合唱コンクールでは練習の成果が発揮できてよかった。楽しかった。

2 学校満足度の低い生徒 B 生徒の場合



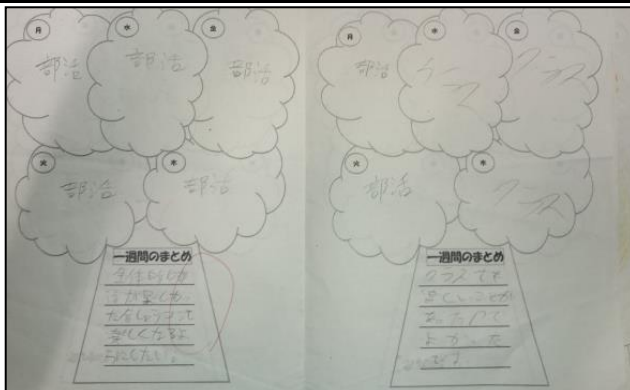
学級に対してなじめず、友人関係も希薄だった生徒がこの取組を通して、学校への満足度が高まったと回答している。最初に比べ、書く量も増えた。内容も楽しかったことや、1日の様子を詳しく記入するようになった。

友人関係も、クラスの仲間とコミュニケーションをとる場面が増えている。また、部活を通して仲間が増えていることもひとつの要因であると感じており、楽しさを見いだしている。

《一週間のまとめ》

- ・今週は良かったこと、楽しかったことの他に頑張ったことも書けたので頑張って書いていきたい。
- ・部活が楽しく感じるが増えてきた。

3 不登校傾向のある生徒 C 生徒の場合



この生徒は不登校傾向の生徒で、第1アンケートから学校に対して楽しさを感じることができていない。この取組を実施しても、最後まで変化がなかった。仲間の楽しさを知っても、自分に置き換えて考えることが、なかなかできていない。クラスでの居場所、所属感を感じさせることが難しかった。

しかし、学校は休まず毎日登校しており、その理由のひとつが、部活である。記入していることも部活と記入していた。中学校では部活が生徒の学校に対する楽しさや満足感を得る大きな要因となるのだと考えられる。

《一週間のまとめ》

- ・ほとんど部活で楽しかった。
- ・クラスでも楽しいことがあったのでよかった。

V 尺度得点を用いた分析結果

1 分析① 介入前に学校ごとに相違があるか

全ての対象校に、同様の介入を行う場合、介入前の尺度得点も同様である必要がある。したがって、まず、対象小中学校の介入前尺度得点に相違が認められるか否かを、以下の分析を行うことで検討した。検討の結果、全ての学校で介入前の尺度得点に相違は認められず、同様の状態であることが確認された。

分析①の方法と結果

学校群を独立変数、介入前の尺度得点を従属変数とした Kruskal Wallis 検定を行った。検討の結果、全ての尺度得点において、学校群における相違は認められなかった（友達との関係： $\chi^2(3)=5.179$, $p=.159$ ；先生との関係： $\chi^2(3)=3.986$, $p=.263$ ；学業場面： $\chi^2(3)=1.727$, $p=.631$ ；学校満足度 $\chi^2(3)=3.119$, $p=.374$ ）。

2 分析② 介入前後の比較 学校ごとにどのように変化したか

次に、対象小中学校ごとに、介入前後の効果を確認するため、以下の分析を行った。Table.2 に介入前後における記述統計量を示す。検討の結果、所沢小学校（1年生）では、友人との関係に対する認識が Positive に変化し、所沢小学校（4年生）では、学校満足度が高まった。また、富岡小学校では、友人との関係に対する認識が Positive に変化するとともに学校満足度が高まった。さらに、狭山ヶ丘中学校では、先生との関係に対する認識が Positive に変化するとともに学校満足度が高まった。

分析②の方法

対象小中学校ごとに、介入前後における各尺度得点（友達との関係・先生との関係・学業場面・学校満足度）の比較を行うために、介入前後における各尺度得点を従属変数とした Wilcoxon の符号付順位検定を行った。

分析②の結果

東所沢小学校（1年生）

友人との関係でのみ有意差が認められた（友達との関係： $Z=|2.444|$, $p=.015$ ；先生との関係： $Z=|1.881|$, $p=.060$ ；学業場面： $Z=|1.785|$, $p=.074$ ；学校満足度： $Z=|.996|$, $p=.319$ ）。

所沢小学校（4年生）

学校満足度でのみ有意差が認められた（友達との関係： $Z=|1.093|$, $p=.274$ ；先生との関係： $Z=|.825|$, $p=.409$ ；学業場面： $Z=|1.900|$, $p=.057$ ；学校満足度： $Z=|2.642|$, $p=.008$ ）。

富岡小学校（6年生・介入群）

学校満足度のみで有意差が認められた（友達との関係： $Z=|.754|$, $p=.451$ ；先生との関係： $Z=|.756|$, $p=.450$ ；学業場面： $Z=|.054|$, $p=.957$ ；学校満足度： $Z=|3.128|$, $p=.002$ ）。

富岡小学校（6年生・統制群）

友だちとの関係および学校満足度で有意差が認められた（友達との関係： $Z=|2.060|$, $p=.039$ ；先生との関係： $Z=|1.307|$, $p=.191$ ；学業場面： $Z=|1.517|$, $p=.129$ ；学校満足度： $Z=|2.171|$, $p=.030$ ）。

狭山ヶ丘中学校（1年生・介入群）

先生との関係・学校満足度で有意差が認められた（友だちとの関係： $Z=|.651|$, $p=.515$ ；先生との関係： $Z=|3.537|$, $p=.000$ ；学業場面： $Z=|1.677|$, $p=.094$ ；学校満足度： $Z=|4.707|$, $p=.000$ ）。

狭山ヶ丘中学校（1年生，統制群）

学校満足度でのみ有意差が認められた（友達との関係： $Z=|.512|$ ， $p=.608$ ；先生との関係： $Z=|.575|$ ， $p=.565$ ；学業場面： $Z=|.620|$ ， $p=.535$ ，学校満足度： $Z=|5.097|$ ， $p=.000$ ）。

3 分析③

友人との関係を **Negative** に認識している子ども達、先生との関係を **Negative** に認識している子ども達、学業場面で不適応を起こしている子ども達、学校満足度が低い子ども達に介入効果は認められるのか

介入前から、学校に居場所をつくりにくい児童生徒に対する介入効果が認められることが望ましい。したがって、ここでは上記の児童生徒を抽出し、介入効果の検討を行った。分析と結果は以下の通りである。検討の結果、全ての対象小学校において、**Negative** な認識は **Positive** に変容し、学校満足度は高まった。富岡小学校（統制群）では、全ての尺度得点で変化は認められなかった。また、狭山ヶ丘中学校では、介入群では **Negative** な認識は **Positive** に変容し、統制群では先生との関係に対する **Negative** な認識が **Positive** に変容し、学業場面の不適応感は低減した。一方、学校満足度は介入群・統制群で低減した。結果を **Figure.1**・**Figure.2** にまとめる。

※介入群：取り組みを実施した集団 統制群：取組を実施しなかった集団

分析③の方法

使用した尺度について、友だちとの関係では高得点群、先生との関係では低得点群、学業場面では高得点群、学校満足度では低得点群で、学校不適応傾向が高いと判断することができるため、最後に学校ごとに、友人との関係・学業場面ではそれぞれの高得点群、先生との関係・学校満足度ではそれぞれ低得点群における介入効果を検討するため、介入前後における各尺度得点を従属変数とした **Wilcoxon** の符号付順位検定を行った。なお、群分けは、各尺度得点の平均以上である者を高得点群、平均未満である者を低得点群とした。

結果（小学校） 東所沢小学校・所沢小学校・富岡小学校

友だちとの関係高得点群

- ・東所沢小学校（1年生）で有意差（ $Z=|2.752|$ ， $p=.006$ ）が認められた。
- ・所沢小学校（4年生）において有意差（ $Z=|1.981|$ ， $p=.048$ ）が認められた。
- ・富岡小学校介入群で有意差（ $Z=|2.254|$ ， $p=.024$ ）が認められ、富岡小学校統制群で有意差は認められなかった（ $Z=|1.906|$ ， $p=.057$ ）。

先生との関係低得点群

- ・東所沢小学校（1年生）で有意差（ $Z=|2.533|$ ， $p=.011$ ）が認められた。
- ・所沢小学校（4年生）において有意差（ $Z=|2.388|$ ， $p=.017$ ）が認められた。
- ・富岡小学校介入群で有意差（ $Z=|2.158|$ ， $p=.031$ ）が認められ、富岡小学校統制群で有意差は認められなかった（ $Z=|1.897|$ ， $p=.058$ ）。

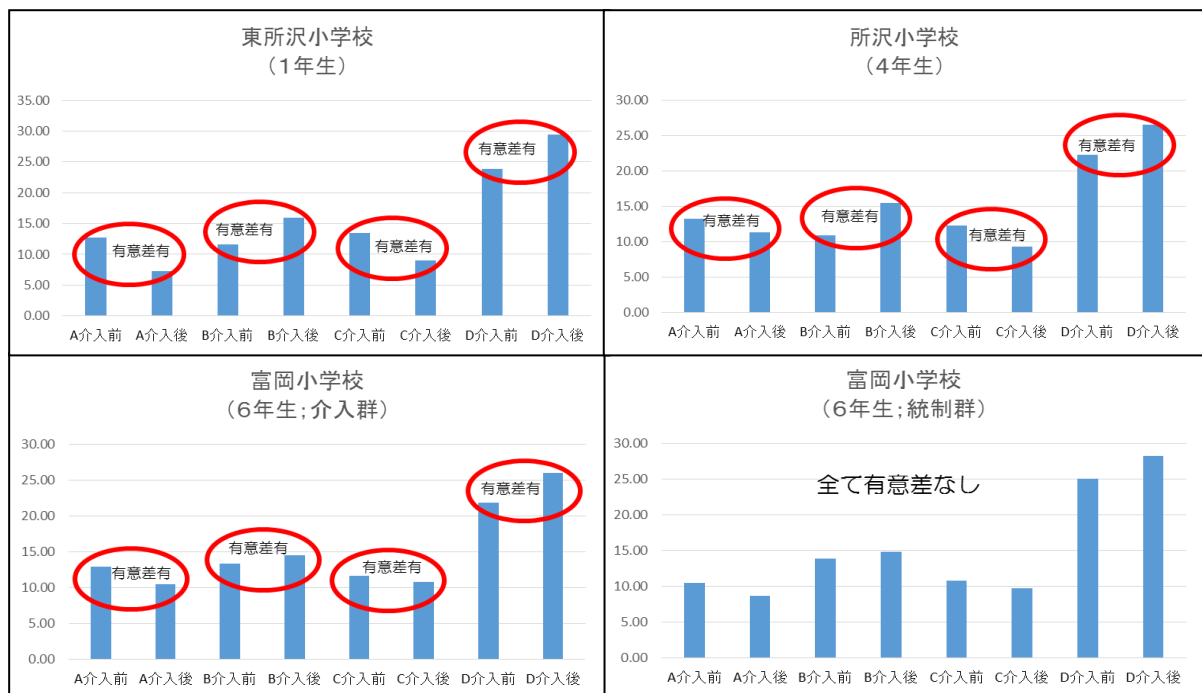
学業場面高得点群

- ・所沢小学校（4年生）において、有意差（ $Z=|2.663|$ ， $p=.008$ ）が認められた。
- ・東所沢小学校（1年生）において、有意差（ $Z=|1.897|$ ， $p=.058$ ）が認められた。
- ・富岡小学校介入群で有意差（ $Z=|.986|$ ， $p=.324$ ）が認められ、富岡小学校統制群（ $Z=|1.869|$ ， $p=.062$ ）で、有意差は認められなかった。

学校満足度低得点群
<ul style="list-style-type: none"> ・東所沢小学校（1年生）において、有意差（$Z= 2.375$, $p=.018$）が認められた。 ・所沢小学校（4年生）において、有意差（$Z= 2.266$, $p=.023$）が認められた。 ・富岡小学校介入群で有意差（$Z= 2.234$, $p=.025$）が認められ、富岡小学校統制群で有意差は認められなかった（$Z= 1.689$, $p=.091$）。
結果（中学校） 狭山ヶ丘中学校
友だちとの関係高得点群
介入群でのみ有意差が認められた（介入群： $Z= 2.027 $, $p=.043$ ；統制群： $Z= .516 $, $p=.606$ ）。
先生との関係低得点群
介入軍・統制群ともに有意差が認められた（介入群： $Z= 3.300 $, $p=.001$ ；統制群： $Z= 2.664 $, $p=.008$ ）。
学業場面高得点群
介入群・統制群ともに有意差が認められた（介入群： $Z= 2.926 $, $p=.003$ ；統制群： $Z= 2.645 $, $p=.008$ ）。
学校満足度低得点群
介入群・統制群ともに有意差が認められた（介入群： $Z= 3.308 $, $p=.001$ ；統制群： $Z= 3.419 $, $p=.001$ ）。

Figure.1

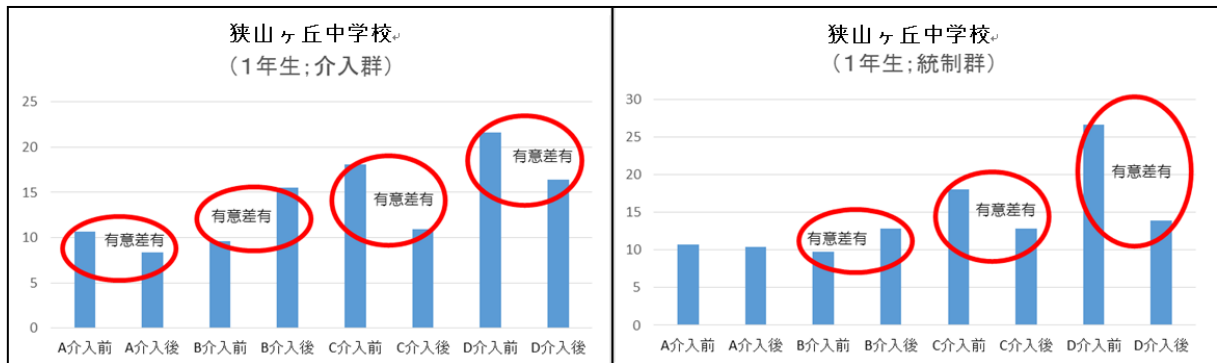
群分け後 介入前後の変化（所沢小学校・東所沢小学校・富岡小学校 介入群・統制群）



A 友人との関係, B 先生との関係, C 学業場面, D 学校満足度

Figure. 2

群分け後 介入前後の変化（狭山ヶ丘中学校 介入群・統制群）



A 友人との関係, B 先生との関係, C 学業場面, D 学校満足度

4 結果の考察

(1) 東所沢小学校（1年生）

- ・学校満足度は介入前から、比較的高い数値を出していた。介入後も高まってはいるが、他の項目と比べると、他の項目と比べ、目立った上昇はないものと考えられる。1年生ということもあり、学校行事のすべてが初めての経験で、楽しみなことが多かったように思える。不満足ということよりも、年間の流れを知って行く上で、楽しい経験が増えていった結果といえる。
- ・有意差が認められたのが、「友だちとの関係」、「先生との関係」である。1年生という学年からも、「楽しさの木」によって、今まで関わりがなかった児童同士の関わりが増え、「友達との関係」の数値が上がったと考えられる。
- ・個人で行っている「楽しさの木」では毎日の楽しかったことを記入し、提出しているため、教師はどの児童が何を楽しんでいるのか把握することができる。そのため、自然とそれぞれの児童に対して、何が楽しいか、興味があったのは何か、声をかけたり一緒に取り組んだりすることができた。その効果もあって、「先生との関係」も得点が高まったのではないかと考える。
- ・小学校1年生から生活の中で楽しさを見つける活動を取り入れることで、学年が進んだとしても、学校生活の中で楽しさを見つけることができると考える。高学年になればなるほど不登校児童が増えているため、予防という観点から考えたときに、1年生から取り組むことには意義があるのではないだろうか。

(2) 所沢小学校（4年生）

- ・1日を振り返る経験を積むことで、意識して楽しかったことを想起できるようになってきた。学校生活の中でポジティブな体験を認知できたことで、今回の結果が得られたのではないだろうか。
- ・9、10歳は語彙が増え、表現力が豊かになる年齢である。そのため、自分の体験を言語化することで、自分の体験を再認知することができ、学校生活を肯定的に受け止めることにつながったのではないだろうか。
- ・友だちからの見られ方を意識し始めるのもこの時期である。背面黒板の「楽しさの木」

の取り組みにより、友だちの考えや楽しかった体験を知ることができ、そこから自分の楽しかったことを意欲的に表現することができるようになったのではないだろうか。

- ・背面黑板や個人ノートの「楽しさの木」には、クラスレクや休み時間の友だちとの関わりに関する記述が多く見られた。この年齢は、友だちと積極的に関わる段階であることから、そこで得た楽しさを「楽しさの木」に可視化することで、自分の学級での居場所を認知し、学校満足度が向上したのではないだろうか。

(3) 富岡小学校(6年生)

- ・学力に不安を抱いている児童は、学校生活全体が嫌になっている傾向にある。楽しさの木を行うことで、授業中でも楽しさがあるということを見つけていった結果から、学業場面での不安の減少という変化が認められたものと考えられる。
- ・行事が多かった。その中で、達成感や人との関わり楽しさを見い出していったと考えられる。
- ・一日一日を振り返ることで、今日一日は、誰と遊んだのかということを確認し、人との関わりに気が付いてきた、ということが考えられる。また、自分と気が合う、遊んでいて楽しい、という友だちが自分なりに見つけられたと考えられる。
- ・楽しかったことを文章化することで、自分の考えを整理する機会になったと考える。
- ・背面黑板に書くことで、他の人の楽しいことを確認することができ、自身の楽しさを見つける手立てとなったと考えられる。また楽しさもたくさんあることに気がついた、と考えられる。

(4) 狭山ヶ丘中学校(1年生)

- ・生徒とのやりとりができるツールの1つとして中学1年生にとっては良かったと思う。
- ・実施をしていないクラス(統制群)と比較して、担任との距離を縮めることができたと判断できる。
- ・学校満足度が低くなった背景として、小学校とは大きく違った行事があったからだと推測できる。その時期に、体育祭・合唱コンクール・定期テストが重なっていた。表面上は行事でクラスは盛り上がり、団結が強まったが、生徒にとってはかなりの負担となっていたことが分かった。
- ・1年生にとって、初めての経験で苦痛と感じている部分もある。また、小学校では最高学年として、引っ張る立場だったのに対し、中学校では1番下の学年に変わった気持ちの面での不安やジレンマも生まれているのではないか。そこから不登校につながる可能性が出てくる。生徒一人一人の内面に寄り添うことの必要性がある。

(5) 全体を通して

- ・「楽しいこと」「良かったこと」を考え、それを文字として残させるということが児童生徒にとって、効果の高い取組であることが証明された。取組の繰り返しによって、見返すことが出来るので、その点も児童生徒にとっては良い結果を生むことにつながったと考えられる。
- ・一日を振り返るということが児童生徒にとってよい機会となった。
- ・人によって楽しさの度合いが違うことを知ることで、自分の考えに対して、Positiveに捉えられたのではないか。

- ・日々記入させた「楽しさの木」は児童にとってはかなり効果の高い取組である。先生との関係を高める1つの手立てになると感じる。記入した内容を担任は何かの機会で話することがある。それが、児童生徒との距離を縮める1つのきっかけになっているのだと感じる。
- ・人は楽しさ・良かったことを考え続けることで、気持ちが前向きになる。
- ・学校が楽しいと感じることは、学校内での居場所作りにつながる。この取組が不登校予防の手助けの1つになることが期待できるだろう。
- ・背面黑板にある「楽しさの木」を見ることで、自分以外の人の「楽しさ」の感じ方を知ることができる。それを知ることができる機会は普段の生活ではないが、この取組によって知ることができる。それが、効果の表れの1つの要因となった
- ・小学校ではすべてに効果が期待できる取組である。児童にとって、楽しいことを振り返り文章・言葉にすることは学校に対して、前向きに考えることができる取組となっていると感じる。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

(1) 楽しさの木を書くことで児童生徒の変容が見られた。

最初は、楽しいことはなんだろう、と戸惑う児童生徒もいたが、毎日の取組で書けるようになってきた。一日を振り返り、書く機会を設けることで、その場で自分の行動を振り返ることができた。下記の児童生徒のように、背面黑板を利用して、「楽しさ」の木を作って可視化することで、自分が気付かなかったことも学級で共有することができた。個人に留まっていた楽しさの範囲が、徐々に集団の中での楽しさを見い出せるようになってきた。

この積み重ねにより、一日一日を大切にしようとする児童生徒も見られるようになり、児童生徒から「また明日も楽しいことがある。」という声も聞こえ、前向きに学校生活を捉えることができた。これが不登校予防の1つの手立てといえる。

感想
 “楽しさの木”を書くと、その日の
 楽しさ、~~た~~事が振り返れて
 “今日も楽しかったな～!”って
 思える。だから昨日を楽しく終わらせて
 すっごくいい良いと思った。

一日一日を振り返ること
 により、少しのことでも
 楽しく思えました。

・最初は書くのが
 めんどくさいと思っ
 けど、やってみると
 1日の学校生活の
 楽しさが、たことが
 自然に書けるよう
 になり、学校がもっと
 楽しくなりました。

(2) 担任が負担なく実践できるため、継続して行うことができた。

帰りの会の数分間で行うことができ、特別な準備もないため、担任の負担なく実践できる。児童生徒も毎日取り組んでいるため、自発的に書けるようになり担任としての負担は少ない。

中学生はもとより小学校1年生でも無理なく実施できる。そのため全ての学級で実施可能といえる。

2 課題

(1) 落ち着いた環境づくり

児童生徒の実態に合わせた時間を確保し、落ち着いて書ける環境を確保する必要があった。慌ただしい中で書かせてもよい振り返りは望めない。そのため、落ち着いた環境づくりが必要である。

(2) 声掛けの工夫

今回、個別ノートには、コメントはつけなかった。今後、他者から声掛けや文字によるフィードバックを行うとともに、楽しさの共有を図ることで、児童生徒に新たな変容が見られるのではないかと考えた。他者との関わりを持つ場面を設定することで、さらなる効果を期待できる。

(3) 長期的な介入

本研究は、児童生徒に対し、9月から11月の3ヶ月間の介入による調査結果を基盤として研究成果を求めた。仮に、年度当初より長期的な介入を行う目的であるならば、学校体制も考慮した教育プログラムとして研究するべきである。

(4) 効果検討の必要性

本研究は、各学校において実践され、不登校予防の手立てとして活用されることを第一の目的として行われた。教職員によって効果の検証がなされ、取組について、より各学校の実情や児童生徒の実態に即したものとして検討され、洗練されるべきである。そのためには、検証方法はより簡易で、準備や時間が必要最低限であることが求められ、今後の課題として挙げられる。